府立寝屋川高等学校
准校長　大森　孝志

平成 27 年度　学校経営計画及び学校評価

１　めざす学校像

多様な人々が集う定時制の課程で、勉強がわかる喜び・人に認められ人と理解し合える喜び・夢や志を抱く喜びを伝え、生徒たちに生き生きとした生活を保障する学校をめざす。

１．生徒が自分の未来を創造できる学校
２．生徒一人一人が大切にされる安全で安心な学校
３．地域・家庭と連携し、協力して生徒を育てる学校

２　中期的目標

１　勉強がわかる喜びを伝える

（１）授業内容が「分かること」の楽しさを体験することで、「学ぶこと」に意欲をもつ生徒を育てる。

ア　全教員で、生徒が「分かった」と実感できる授業づくりに取り組み、学力の定着及び出席者の増加を図る。

①　生徒の学力に応じたわかりやすい教材を作成し授業を行う。

②　ＩＣＴや視覚教材を用いた授業および参加体験型の授業を導入し、生徒の学習意欲を高める。

③　授業見学、研究授業等により、各教員が指導法の工夫・改善に取り組む。

※生徒による授業アンケートで「生徒意識」（①授業内容に興味・関心を持つことができた。②授業を受けて知識や技能が身についた。）の肯定的回答（平成 26 年度 75%）を平成 29 年に 80%以上にする。

※学校教育自己診断で「学校の授業はわかりやすい」（平成 26 年度は 56%）を平成 29 年度には 65%にする。

イ　全教員で授業規律について指導する意識を共有し、生徒が落ち着いて学習できる環境づくりに努める。

※学校教育自己診断の「授業中は落ち着いて学習できる雰囲気である」（平成 26 年度は 50%）を平成 29 年度には 60%にする。

※１年生の進級率（平成 26 年度 30.9%）を平成 27 年度は５%向上させ 36%にする。

２　人に認められ人と理解しあえる喜びを伝える

（１）命の大切さ・人権意識・善悪の判断など、人間としての基本的な倫理観や規範意識を育てる。

ア　生徒指導時のみならず、教科の学習およびＨＲ・総合的な学習の時間等も含めた教育活動全体を通して指導する。

※生徒向け学校教育自己診断における「命、社会のルール」の肯定的回答（平成 26 年度 66%）を平成 29 年度には 75%以上にする。

（２）様々な教育活動で人と関わる体験を通して、コミュニケーション能力の育成を図る。

ア　挨拶ができる生徒を育てる。

イ　生徒会行事等を通して、リーダーとして活動できる生徒の育成を図るとともに、仲間とともに行事に参加できる生徒を育てる。

ウ　各種行事において、保護者や地域住民および地域の中学校教員と積極的に連携・交流を図る。

エ　ボランティア活動や部活動等を通し、学校に対する誇りと自己肯定感を育てる。

※学校行事等で来校する保護者や家族の数を、前年比５%を目標に増やす。

（３）生徒指導に際して、各教員が生徒との人間関係を最大限大切にしながら、家庭・中学校・地域との連携を密にして取り組む。

※学校教育自己診断における「先生の指導について理解できる」（平成 26 年度 64%）を平成 29 年度には 73%以上にする。

※１年生の進級率（平成 26 年度 30.9%）を平成 27 年度は５%向上させ 36%にする。

３　夢や志を抱く喜びを伝える

（１）生徒が自己の将来について考え、自らの生き方を選択できるように進路指導の充実を図る。

ア　４(３)年間の進路指導方針を元に、各学年における具体的な進路の取り組みを明確化する。

イ　進路に関する十分な情報を生徒に提供する。

ウ　進路ガイダンス機能の充実を図るとともに、個々の生徒のニーズに合った進路指導をする。

エ　全教員で進路指導に取り組む校内体制を築く。

オ　就業体験をする生徒を増やす。

※卒業生徒の進路決定率（平成 26 年度 53%）を平成 29 年度には 60%以上にする。

※生徒向け学校教育自己診断における「進路指導満足度」（平成 26 年度 56%）を平成 29 年度には 65%以上にする。

４　組織の活性化と人材育成

（１）校内組織の活性化と職務の効率化の取組み

ア　校務検討委員会を中心に学校改革を推進する。

※准校長の諮問機関的な役割を担う。

イ　緊急災害対応時における教職員組織の明確化

（２）首席を中心に、経験年数の少ない教員の育成に取り組む。

府立寝屋川高等学校

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析［平成２７年１２月実施分］	学校協議会からの意見
（%の数字は肯定的回答率、昨年度 → 今年度 ） **１勉強が分かる喜びを伝える** ①生徒へのアンケート結果 ・学校の授業は、プリント、スライド、映像等の補助教材も使うなどの工夫をしている。51%→75% ・学校の授業の内容についていける。　56%→72% ・学校の授業の説明はわかりやすい。　56%→75% ・学校の授業中は、落ち着いて学習できる。50%→64% 「勉強が分かる喜びを伝える」ことに関しては、かなりの進展があった。学校全体で取り組んだ授業見学、研究授業、研修等により、各教員が指導法の工夫・改善に取り組んだことの結果が表れている。 ②教員へのアンケート結果 ・基礎・基本を明確にし、教材の精選・工夫を行っている。94%→95% ・生徒の実態をふまえ、学習形態の工夫・改善に努めている。100%→100% ・到達度の低い生徒に対する学習指導を、全体的課題として取り組んでいる。94%→95% 教員は授業の改善に対してかなり高い意識を持っている。 **２　人に認められ人と理解しあえる喜びを伝える** 主な項目を見てみると、 「挨拶ができる生徒を育てる」について ①生徒へのアンケートの結果 ・自分は、あいさつをするようになった。（今年度作った新項目）→67% ②保護者へのアンケート結果 ・子どもは、以前と比べるとあいさつをするようになったと思う。（新項目）→75% ③教職員へのアンケート結果 ・教職員に対してあいさつをする生徒が増えてきている。（新項目）→95% ・右記の事務室からの意見にもあるように、挨拶運動は学校全体の取組みとなっている。また、保護者の 75%が子どもの変容に気付くぐらいの効果があがっている。 「生徒に寄り添った指導をする」について ①生徒へのアンケートの結果 ・学校生活についての先生の指導については理解できる。64%→77% ・担任の先生以外にも職員室、保健室等で気軽に相談することができる先生がいる。50%→58% ②教職員へのアンケート結果 ・カウンセリングマインドを取り入れた生徒指導を心がけている。94%→95%　教職員は十分な意識を持って指導をしている。 **３　夢や志を抱く喜びを伝える** ①生徒へのアンケート結果 ・ホームルームなどで、自分の将来について考える機会がある。43%→73% ・学校は、就職や進学についての情報を十分に知らせてくれる。56%→77% と進路指導が充実してきている様子が示されている。 **４　組織の活性化と人材育成** この項目に直接関係があるアンケートはないが、関連あるものを見ると ①教職員へのアンケート結果 ・日々の教育活動における問題意識や悩みについて、気軽に相談し合えるような職場の人間関係ができている。82%→90% ・校内研修組織が確立し、計画的に研修が実施されている。88%→95% ・校内研修は、教育実践に役立つような内容になっている。89%→61% ・教員間で授業方法について検討する機会を積極的に持っている。65%→95% いずれも高い数字が示される中で、「校内研修が教育実践に役立つような内容になっている」については、研修の内容に更なる検討が必要であることを示している。また、「教員間で授業方法について検討する機会を積極的に持っている」における数字の伸びは、お互いの授業見学が活発に行われている結果である。 **その他** ①生徒へのアンケート　・学校に行くのは楽しい。47%→57% ②保護者へのアンケート　・学校に行くのは楽しいようだ。59%→75% が示すように、学校が生徒にとって楽しいところとなってきていることが教職員にとっては何よりうれしいことであり、この数字が一層伸びるように頑張りたい。	第１回　平成 27 年６月 15 日 平成 27 年度の学校経営計画についての説明後に出された意見 **１「勉強がわかる喜びを伝える」について** ・生徒それぞれが持っている課題をいかに克服し、マイナスのモチベーションをどうプラスに転じるかが大きな課題である。 **２「人に認められ人と理解しあえる喜びを伝える」について** ・あいさつ運動については、コミュニケーション力には個人差があり一律にはいかないが、上級生の力も借りながら、生徒ひとりひとりの特性に応じて広げていってほしい。 ・「ウ　各行事において、保護者や地域住民および地域の中学校教員と積極的に連携・交流を図る」について、誰を招待したのかがわかるように書いた方がよいのではないか。今年度の新たな取り組みとして、地域の方にもアピールするというのを出した方がいいのではないか。 **３「夢や志を抱く喜びを伝える」について** ・教育の場が全日制では学校だけだが、定時制では職場でも社会人として躾られている。それは定時制の強みでもある。さらに就業率を上げるために頑張ってほしい。 **４「組織の活性化と人材育成」について** ・学校行事、イベント等に積極的に関わることでスキルアップでき、力がついてくる。そのエネルギーが授業に活かされ、生徒たちとの繋がりで活かされてくる。積み重ねることで力をつけて欲しい。 ・人材育成のために、全日制、定時制、中学校で授業参観、ＴＴなどの交流をしてみてはどうか。 ・目標やさまざまなデータ、数値を他の定時制高校と比較、検証し、各分掌や学年に返してほしい。 第２回　平成 27 年 11 月 19 日 学校の取り組みについての中間報告の後に出された意見 ①あいさつ運動などを実施して、生徒の変化を教員以外の職員はどのように感じているか。困っていること、良くなってきたこと、などを収集してほしい。 ・（事務室からの意見） 事務室でも、廊下や食堂（給食時）で会う生徒、事務室窓口に来た生徒には、こちらから「こんにちは」と声を掛けると、全員が挨拶を返してくれるようになった。なかには、「ちわっー！」とか「おっす！」と言われることもあるが、それはそれで可愛いなと感じる。無視されたことはなく、しっかり前を向いて挨拶が返ってくるので、以前より学校全体が明るく活気がでてきたように感じる。 就学支援金の手続き等でよく事務室窓口に来ていて親しくなった生徒や、給食で一緒になった生徒は、生徒の方から「こんにちは」と挨拶してくれるようになった。 また、生徒から先生あての電話を取り次ぐ際に「担任おる？」とか「○○（先生の名字を呼び捨て）に代わって！」などと、乱暴に言ってくる生徒に対しては、まずこちらから「こんにちは！」と元気よく言うようにしている。そうすると、たいていの生徒はおずおずと小さい声ではあるが「こんにちは・・」と返してくれる。 その後で、生徒の名前を聞いて「○○先生に何の用事ですか？」と問い直すと、生徒の言葉遣いが少し丁寧になったように感じる。 日常窓口の対応においても、一部の生徒の言葉遣いが気になることが多く、何とかしたいと思っているが、挨拶運動は生徒とのコミュニケーションの第一歩になり得るのではないでしょうか？これからも、事務職員としてこの挨拶運動を続けていきたいと思います。 ②本校で頑張っていることが他校と比較してどうなのか、他校の色々な情報収集をお願いしたい。 ・授業力の向上、進路指導の充実等はすべての学校において取り組まれていることである。一方、挨拶運動は府下約半数の定時制高校において何らかの形で取り組まれている。 ③生徒たちを社会につなげていくために、セーフティーネットとしての定時制の機能をさらに発揮してほしい。 第３回　平成 28 年２月 19 日 １年間の学校の取り組みとその成果の説明後に出された意見 ①中学校時に不登校だった生徒が現在登校し、部活で頑張るなど、高校生活を楽しんでいる様子を見ると、セーフティーネットとしての役割を十分に果たしていると実感する。 ②学校教育自己診断の結果分析を各分掌、教科でしていただていているが、このレベルまで詳しく分析している学校は他にはないと思う。大切なことなので毎年分析を継続していただきたい。 ③遅刻してきた生徒が教室の前のドアから入ることに関して違和感を覚える。授業で使用しているプリントをその場で配布するなどの必要性があるかもしれないが、授業の妨げになるので後ろのドアから入るほうがいいと考える。

府立寝屋川高等学校

本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
１　勉強がわかる喜びを伝える	（１）「分かること」の楽しさを体験できる授業づくり ア　生徒が「分かった」と実感できる授業づくりに取り組み、学力の定着及び出席者の増加を図る。 イ　全教員で授業規律について指導する意識を共有し、生徒が落ち着いて学習できる環境づくりに努める。	ア・生徒の学力に応じたわかりやすい教材を作成し授業を行う。 ・支援を要する生徒とその課題を把握し、教員間で情報共有するとともに、ＳＣやＳＳＷからの助言を参考にし、生徒個々に対応した指導をおこなう。 ・ＩＣＴや視覚教材を用いた授業および参加体験型の授業を導入し、生徒の学習意欲を高める。 ・授業見学、研究授業等により、各教員が指導法の工夫・改善に取り組む。 イ・生徒の授業態度について学校で統一した指導を行う。	ア・学校教育自己診断で「学校の授業の説明はわかりやすい」の肯定的回答（平成 26 年度 56%）を 60%にする。 ・授業アンケートで「生徒意識」（①授業内容に興味・関心を持つことができた。②授業を受けて知識や技能が身についた。）の肯定的回答（平成 26 年度 75%）を３%向上させる。 ・各学期１回の研究授業を行う。 イ・学校教育自己診断で「落ち着いて学習できる雰囲気である」の肯定率（平成 26 年度 50%）を３%向上させる。 ア、イ　１年生の進級率（平成 26 年度 30.9%）を５%向上させる。	ア・学校教育自己診断で「学校の授業の説明はわかりやすい」の肯定的回答 75%（◎）。 ・授業アンケートで「生徒意識」①の肯定的回答２回目 73%　②の肯定的回答１回目 75%(△) ・毎学期の研究授業に加え、授業力向上研修、ＩＣＴ研修、教員による授業見学週間（２回）、職員会議でのデモンストレーション授業（５名）を行い各教員が指導法の工夫改善に取り組んだ ・学校教育自己診断「生徒の実態をふまえ、学習形態の工夫・改善に努めている」教員の肯定的回答 100%（◎） イ・学校教育自己診断で「落ち着いて学習できる雰囲気である」の肯定率 64%（◎） ア、イ　この１年間、わかる授業づくり、授業規律の確立に取り組んだ。その結果１年生の進級率 46%（◎）
２　人に認められ、人と理解しあえる喜びを伝える	（１）基本的な倫理観や規範意識を育てる。 ア　教科の学習およびＨＲ・総合的な学習の時間等も含めた教育活動全体を通した指導 （２）人と関わる体験を通して、コミュニケーション能力の育成を図る。 ア　挨拶ができる生徒を育てる。 イ　生徒会行事等を通したリーダーの育成、仲間とともに行事に参加できる生徒の育成。 ウ　各種行事において、保護者や地域住民および地域の中学校教員と積極的に連携・交流を図る。 エ　ボランティア活動や部活動等を通し、学校に対する誇りと自己肯定感を育てる。 （３）生徒指導に際して、各教員が生徒との人間関係を最大限大切にしながら、家庭・中学校・地域との連携を密にして取り組む。	ア・外部人材等を有効活用し、ＨＲ及び総合的な学習の時間を計画的に実施することで、「学ぶこと」・「生きること」・「社会とのかかわり」について考える機会を設ける。 （２） ア　・教職員から生徒に挨拶の声掛けをするとともに、機会があるごとに挨拶の大切さについて生徒に伝える。 イ　・生徒を中心とした生徒会行事の企画運営を行う。 ・行事に参加する生徒の人数を増やす。 ウ　・各種行事に対する広報活動の活発化 ・昨年度は文化祭への招待のみであったが今年度は体育祭にも招待する エ　・ボランティア活動の継続 ・部活動の活性化をする （３） ・生徒に対し傾聴し、理解し、話し合いによる指導を実践する。 ・経験年数の少ない教員に対して生徒との接し方についての講習を行う。	ア・学校教育自己診断における「命の大切さ、社会のルール、人権の大切さについて考える機会がある」の肯定的回答（平成 26 年度 66%）を３%向上 （２） ア・学校教育自己診断の新たな項目「先生に挨拶をしている」の肯定的回答を 60%にする。 イ・学校教育自己診断「体育祭、文化祭などの学校行事はみんなが楽しく行えている」の肯定的回答（平成 26 年度 60%）を３%向上 ウ・体育祭、文化祭に来校する保護者、地域住民、中学校教員の人数を前年度より５%向上(平成 26 年度 210 名) エ・ボランティア活動の継続 ・部活動参加人数の増加 （３） ・学校教育自己診断における「先生の指導について理解できる」の肯定的回答（平成 26 年度 64%）を３%向上 ・講習実施の有無 （２）（３）１年生の進級率（平成 26 年度 30.9%）を５%向上させる。	（１） ア・大学教授、警察署、ハローワーク、ファイナンシャルプランナー、司法書士等の外部人材を有効活用し講演を実施した。 ・左記項目の肯定的回答 67%（△） （２） ア・事務職員を含めた全教職員で生徒への挨拶の声掛け運動を１年間通して実践した。 ・新たに月一回の全校集会を設け、准校長講話の中で毎回挨拶の大切さを訴えた。 ・左記項目の肯定的回答 67%（◎） イ・体育祭、文化祭等の行事はできるだけ生徒が企画運営を行なえるよう、教員がサポートしていた。 ・左記項目の肯定的回答 62%（○） ・行事生徒参加率（△） 体育祭 35.9%（昨年 36.6%） 文化祭 42.0%（昨年 42.4%） ウ・行事保護者・地域の方の参加人数 体育祭 73 名　（昨年 64 名） 文化祭 203 名（昨年 146 名） 合計 276 名（昨年 210 名） 31%増加（◎） エ・ボランティア清掃は昨年度と同様年５回継続して実施（○） ・部活動参加人数 H26 年 77 名 H28 年１月調査 114 名（◎） （３） ・左記項目の肯定的回答 77%（◎）・教員は生徒に寄り添い、傾聴し、話し合いによる指導を実践している。 ・生徒・保護者対応についての大学教授からの教員向け講演会を実施 ・初任者向けの座談会を２回実施（○） ・１年生の進級率は 46%（◎）

府立寝屋川高等学校

３　夢や志を抱く喜びを伝える	（１）　進路指導の充実を図る。 ア　４（３）年間の進路指導方針を元に、各学年における具体的な進路の取り組みを明確化する。 イ　進路に関する十分な情報を生徒に提供する。 ウ　進路ガイダンス機能の充実を図るとともに、個々の生徒のニーズに合った進路指導をする。 エ　全教員で進路指導に取り組む校内体制を築く。 オ　就業体験をする生徒を増やす。	ア・進路保健部を中心に、今後の進路指導の基本となる学年別の進路学習計画を作成する。 イ・進路のＨＲや総合的な学習の時間を進路指導計画の中で明確に位置づけ、情報提供を行う。 ・外部機関と連携し、生徒が色々な人の生き方に触れる機会を設ける ウ・担任が意識して生徒と話し合うとともに、担任と進路の連絡を密にする。 ・支援を要する生徒とその課題を把握し、教員間で情報共有するとともに、ＳＣやＳＳＷからの助言を参考にし、生徒個々に対応した指導をおこなう。 エ・求人の新規開拓等には全教員で取り組み、卒業学年の進路決定を支援するとともに、各教員の進路指導のスキルアップを図る。 オ・一人でも多くの生徒が就業体験ができるように、アルバイト等を紹介する。	ア・前期中に「進路の手引き」が発行され、生徒に配布できたか。 イ、ウ ・学校教育自己診断における「自分の将来について考える機会がある」の肯定率（H26 年度 43%）を５%向上 ・生徒向け学校教育自己診断における「学校は就職や進学についての情報を十分に知らせてくれる」の肯定率（平成 26 年度 56%）を３%向上 ・卒業生の進路決定率が平成 26 年度は高く 60%であった。(24 年 40%、25 年 50%) 27 年度も 60%を維持する。 エ・指定校求人票の数を増やし 15 人にする。(平成 26 年 11 人) オ・５月時点の就業率よりも年度末の就業率の方が高くなっている。	（１） ア・学年別進路指導計画や「進路の手引き」は完成し、進路ガイダンスにおいて生徒に配布し説明をした。(◎) イ･進路に関する HR を月１～３回確保し情報提供を行うとともに、自分の進路について考えさせた。 ・ハローワークによる職場見学会、外部主催の職業体験を実施 ･「自分の将来について考える機会がある」の肯定率は 73%（◎） ･「学校は就職や進学についての情報を十分に知らせてくれる」の肯定率 77%（◎） ・年度末進路決定率は 55.8%（△） エ・指定校求人票 18 人獲得（◎） オ・５月時点での就業率 56.6% １月時点での就業率 64.1%（○）
４校内組織の活性化と人材育成	（１）校内組織の活性化と職務の効率化の取組み ア　校務検討委員会を中心に学校改革を推進する。 イ　緊急災害対応時における教職員組織の明確化 （２）首席を中心に経験年数の少ない教員の育成に取り組む	ア・本校の将来めざすべき方向性や効果的な情報発信等について検討し准校長に提言する。 イ・緊急災害対応時における教職員組織と対応方法の明確化 （２）・首席が中心となり、経験年数の少ない教員の育成を主眼とした研修を計画し、実施する。	ア・前期中に本校の将来像について、准校長への「提言書」が提出できたか。 イ・マニュアルの完成と全教職員への周知 （２）・年間に３回以上の育成研修が実施できたか。	ア･１月末までに 14 回の校務検討委員会を実施。(H26、９回）本校のこれからのあるべき具体的な姿についての話し合や課題解決に対する多くの提言が検討された。(◎) イ・マニュアルは完成したが、周知はまだできていない（△） ・今年度は初めて大地震による停電を想定した実践的な避難訓練を実施 （２） ・初任者を授業者とし教員を生徒とした研究授業の実施 ・首席が中心となり経験年数の少ない教員の座談会を２回実施 ・校長協会定時制通信制部会主催の初任者研修を本校で開催、その際に本校初任者が研究授業を実施する。 （◎）